

近松名作集

宇野信夫・飯沢匡・田中澄江・矢代静一・高野正巳
武智鉄二・北条秀司・巖谷槇一・小山祐士 訳



近松名作集

日本古典文庫 18

昭和六十三年四月五日 新装版初版印刷
昭和六十三年四月十五日 新装版初版発行

訳者 宇野信夫
矢代静一
北条秀司

装幀 飯沢 匡
清水 勝
発行 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二一三二二
振替口座(東京)〇一〇八〇二
電話(東京)四〇四一二〇(営業)
四〇四一八六二(編集)

印刷 暁印刷株式会社
製本 加藤製本株式会社

落丁・乱丁本はお取替えいたします
定価はカバー・帯に表示しております

Printed in Japan
ISBN4-309-71318-1

目次

近松名作集

曾根崎心中	宇野信夫訳……一
堀川波鼓	田中澄江訳……七
心中万年草	高野正巳訳……一〇
傾城反魂香	北条秀司訳……一五
冥途の飛脚	高野正巳訳……二三
大経師昔暦	小山祐士訳……二五
国性爺合戦	飯沢 匡訳……二八

曾^そ
根^ね
崎^{さき}
心^{しん}
中^{じゅう}

宇
野
信
夫
訳

平野屋徳兵衛（二十五歳）

天満屋お初（十九歳）

油屋九平次（二十七八歳）

観音回り

かしこくも観世音菩薩こそ、安樂世界から、現世にお姿を示現したまい、大慈大悲のみ仏よと、諸人に仰がれる。

「高きにのぼりて見れば——」と、そのむかし、仁徳天皇が、民のにぎわいを願いたもうた難波の里——その三十三カ所の観音をめぐれば、いかなる罪も消滅するという。

——今日しも、初夏のむしあつい日ざかりを、駕籠から下りようとしている女は、その観音回りの戻りでもある。年ころ十八九、咲きそめた初花の風情がある。照りつける日ざしに、笠もかぶっていないけれど、日の神さまは男神——日焼けをさせるようなこともあるまい。

大阪の三十三カ所を巡礼すれば、西国三十三カ所を回ったのも同じといわれている。

その一番は、天満の大融寺。

この御寺の寺号にちなむ河原の左大臣は、その名もなつかしい融の君。その昔、京東六条の邸内に、みちのくの塩がまの風景をそのままにうつそうと、潮を難波からとりよせ、庭先で煮させられたという。そのゆかりの潮汲船は、今なお堀江のあたりに往来して、観音弘誓の舟の面影もかくやとしのばれる。

「普陀落や、岸うつ波は、みくまのの……」

大阪三十三カ所の巡礼をころざし、胸に木札、巡礼歌をうたいながら、八軒屋にさしかかれば、夜もしらじらと明けそめる。

二番の札所は、長福寺。

そこへ着くころ、二番鶏が鳴く。朝日がまばゆく射してくる。

三番は、神明宮。

四番は、法住寺。

五番は、法界寺。

ここで、恋の祈りは禁物だ。法界悋氣をされようと、昔からのいいつたえがある。

その東に、

六番の、大鏡寺。

あたりの若芽も春過ぎて、遅れ咲きの菜種や罌粟の花

——そのあいだを、つばさかわして舞いあそぶ蝶の中に、道ゆく女の袷の袖の染模様を花と見て、そっと肩にとまるものもある。それが、おのずから、揚翅の蝶の紋どころとも見える。

七番、超泉寺。

八番、善導寺。

九番、栗東寺。

天満の札所を、のこりなく回り終わるころには、西の空には夕立雲、薄い手拭では、ふきかねるほど汗みずくなる。

十番の札所は、玉造豊津稲荷。(その夏祭りは、六月二十九日の夜、闇の中で行なわれる。仏は衆生の親という。子を思う闇——ともいう。闇の中で、祭りのとり行なわれることも、道理である)

十一番は、小橋の東寺町にある興福寺。

十二番の慶福寺。ここは、ながめはてしないところだ。はるかに淡路島、潮風に飛ぶ鷗の美しさ。

十三番は、高津の遍明院にある野中の観音。

十四、十五番は、上寺町の長安寺。誓安寺。このあたりから、上り下りの多い谷町筋になる。歩き慣れぬ身は、裾をかきあわせ、ゆるんだ帯を、引きしめる。

十六番は、谷町筋の和勝院。

十七番、重願寺。

十八番、生玉中寺町の本誓寺。

十九番が菩提寺。

二十番、二十一番が、天王寺境内の六時堂に経堂。待宵の恨み、後朝の別れ……愛のたのしさ、恋の悲しみも知らぬ顔の僧たちが、ひたすら勤行にいそしんで、こんこんと鉦を鳴らしている。

同じく金堂、講堂、万燈院が、それぞれ、二十二、二十三、二十四番。

新清水は、二十五番。

この木陰の涼風に、一服つけて、ひとやすみする。

二十六番、高津下寺町の心光寺。

二十七番、大覚寺。

二十八番、金台寺。

二十九番、大蓮寺。

三十番、島の内の三津寺。

三十一番、白髪町の大福院。

三十二番、博労町の稲荷神社。

三十三番、平野町新御霊境内の十一面観世音。

こうして、三十三に御身をかえて、塵の世にあらわれたまひ、色でみちびき、情で教え、恋を菩提の橋として、われらを渡して救いたもうのが、観世音菩薩である。

内本町平野屋の手代徳兵衛は、丁稚に醬油樽をになわ
せて、生玉の社にさしかかった。四月六日の長い日も、
くれかかるころであつた。

と、出茶屋の床から、

「徳さま……徳さま……」と、手をたたいて呼ぶ声。

見れば、それは、人目をしのぶ仲の、天満屋のお初で
ある。

徳兵衛は丁稚の手前、編笠のうちから、女にそつと
なずいて見せ、

徳兵衛 これ、長蔵、おれは、あとから往の。そなたは
寺町の久本寺様、長久寺様、上町から屋敷方まわつて
そうして家へ往にや。そうしてな、徳兵衛も、追つ
けもどると言や。それ、それ、忘れずに、安土町の紺
屋へ行て、勘定の銭とりや。

長蔵 へい。

徳兵衛 さあ、さあ、早う往にや。

長蔵 へい。

徳兵衛 ああ、これ、待ちや。道頓堀へ寄りゃんなや。

——丁稚の影が見えなくなるまで見送ってから、徳兵
衛は、簾をあげた。

徳兵衛 お初じゃないか。

と、編笠をとろうとすれば、

お初 ああ、そのままでもいいやんせ。

と、お初は、それを手でおさえて、

お初 今日は田舎の客につれられてな、三十三番の観音
回りしてきました。この茶屋で晩まで酒にするのじや
と言うて、その客は、今し方声色ききにきました。

もどつてきたら、むずかしい。駕籠の衆も、みな顔見
知り、やっぱり笠きていやしんせ。それはそうじや
が、このごろは、とんと音沙汰なし……どうしたわけ
でござんす。気づかいなれど、お店の首尾を知らね
ば、便りもならず、丹波屋まではお百度ふむほどたず
ねたれど、あそこへも、なんのおとずれもないとのこ
と……。さあ、だれさんであつたか、そうそう、座頭
の太市が友達衆の話では、在所へ行かんしたとのこと
なれど、それも、まことにならず、あんまりな徳さま
……わしは、どうなるうとも、ききとうもないかい
な。こなさん、それですもうぞいの。わしは病いにな
るわいな。嘘じゃござんせぬ、その証拠、それ、この
胸のつかえを見さんせ……。

と、ついと手をとつて、ふところへ引き入れる。男も泣
いて、

徳兵衛 おお、道理、道理、さりながら、言うて苦にさ
せ、何しようぞいの。この中、おれが憂き苦勞、盆と

正月をあわせたうえ、十夜^とお祓い^{はらい}煤掃^{すすり}きと、一度にすると、こうはあるまい。銀のことやら、何やかや、それに、京へも上ってきた。ようも、ようも、徳兵衛の命は続き狂言にしたらば、哀れであらうぞ。と、ため息を、ほっとつく。

お初 軽口の段かいな。それほどの大事でのうても、いちちお話しなされたに、なぜ打ち明けてはくさんせぬ。これ、徳さま、かくさんしたには、わけがあるう。なぜ打ち明けてはくさんせぬ。

お初は、男の膝にもたれて泣いた。

——徳兵衛は主人のことを、表向きは「旦那」と呼んでいるが、実は、肉親の叔父であった。

したがって、主人も目をかけてくれ、徳兵衛も、一生懸命に奉公した。

その正直な働きぶりを見てとった主人は、女房の姪に二貫目の銀を付け、徳兵衛にめあわせようという相談を、去年から持ち出していた。

しかし、お初と堅い約束をかわしている徳兵衛は、そんな話には、のらなかった。そのままで、月日を送っているうちに、在所にいる徳兵衛の継母が、彼には内証で、主人とその約束を結び、二貫目の銀をもらって、帰ってしまった。

それを、徳兵衛は夢にも知らなかった。主人から、祝

言の話が出て、はじめて知って、おどろいた。怒った。

本人の自分には、なんの沙汰もなしに、母をだまして、一生のだいいな縁談をとりきめてしまおうとは、あんまりなさねよう……と、さすがの徳兵衛も、主人にくってかかった。

「どうでも、この縁談、いやでござります」
と、きっぱりと、ことわった。

主人も、腹を立てた。徳兵衛が曾根崎新地へ通うことを知っている主人は、

「おのれが嫁をきらうのは、天満屋のお初という女と腐り合っているからじゃ。よし、このうえは、もう、嫁はやらぬ。やらぬからは、銀を返せ。四月七日までにきつと返し、商売の勘定もせよ。それ済んだうえに追い出して、嚮向大阪の地は踏ませぬぞ！」
と、怒りたけた。

徳兵衛も負けぬ気の、
「かしこまった」

と、在所へもどった。そして、継母に掛け合ったが、この母がまたひどい強欲者、一度つかんだ銀を、はなす人ではなかった。

で、京の五条の間屋へ行って頼んだが、だめだった。よんどころなく、もう一度在所へ下った。そして、村中の人に口をきいてもらった。それでようよう母から、そ

の二貫目の銀を、取り戻すことができた。

そんなこんなで、徳兵衛は、夜の目もねずに駆けまわっていたので、お初に便りすることもできなかったことを、口早に話してきかせた。

徳兵衛 おっつけ旦那に、銀を返し、それでさりと埒はあく。されどな、大阪には、置かれまい。時には、どうして会わりようぞ。たとえば、骨をくだかれても、そなたに離れて、どうしようぞ……。

徳兵衛の声は、ふるえた。

お初 その御苦労も、みなわしゆえ、さりながら、心たしかに思し召せ。大阪をせかれさんしても、こなさんの身一つ、どうしてなりとも置く分は、わしが心にあること……。会うに会われぬその時は、この世ばかりの約束か。三途の川は、せく人も、せかる人もござんすまい……。

と、きっぱりと言ったが、

お初 それにしても、七日といえば、あすのこと、とても渡す銀ならば、早う渡して、親方の機嫌を、とらんせ。

——しかし、その銀は、今、徳兵衛の手にはなかった。

先月晦日のことであつた。

徳兵衛と兄弟同様につきあっている油屋の九平次が、

「たった一日要ることがある。三日の朝は、必ず返す」と、言うので、どうせ七日まではいらぬ金だから、その銀を貸してやった。

しかし、三日が四日と過ぎ、今日は六日。

徳兵衛 昨日は留守で会いもせず、今朝たずねようと思つたが、明日ぎりに、商売の勘定しまおうと、得意まわりして、今となった。晩には行つて埒あけよう。しかしなあ、あいつも、男をみがく奴、おれの難儀も知っている。如才はあるまい……。気づかいしやんな。

徳兵衛は、あくまで友達を信じていた。

へ初瀬も遠し難波寺、名どころ多き鐘の声……。

この時、謡の聲が、近づいてきた。

見れば、それは、どこか遊山の帰りらしい九平次と、町の衆であつた。

徳兵衛は、興ざめ顔で、つかつかと、友達のそばへ寄つた。

徳兵衛 九平次、いったいこりやどうしたということじや。わしの方へは音沙汰なしで、遊山どころではあるまいぞ。さあ、今日は埒あけてくれ。

と、手をとって、引きとめる。九平次は、意外な顔つきで、

九平次 なんのことぞ、徳兵衛、この連れの衆は、町の衆じゃぞ。上塩町へ伊勢講に行つて今もどるところじ

やが、酒も少しは飲んでゐる。利腕ききうでにとって、なんとする。そそうをするな。

と、笠をとる。

徳兵衛 いや、この徳兵衛、そそうはせぬ。あとの月の二十八日に、銀二貫目を、この三日に返す約束で、貸してやった。それを、返せということじゃ。

言わせもはてず、九平次は、大口あけて笑いだした。

九平次 これこれ、徳兵衛、おぬし、気でも違うたか。おのれと数年交われども、一銭借りたおぼえはない。何ぬかす。後悔すな。

九平次が、とられた手を、ついとふりはなせば、連れの衆も、笠をはらりとぬぐ。

徳兵衛の顔色はかわった。

徳兵衛 言うな、言うな、九平次、わしがこんどの難儀、入用の銀なれど、「晦日くわいじつたった一日で、身代が立たぬ」と言うゆえ、日ごろのよしみで、男すぐで貸した銀。「証文もいらぬ」と、おれが言うたら、「念のためじゃ。判をしよう」と、おれに証文かせ、おぬしが捺した判がある。

九平次 なに、判がある？ 判とは、見たいものじゃ。

徳兵衛 おお、見せいでおこうか。

と、徳兵衛は、もう血眼ちまなこだった。ふところの鼻紙入れから、証文をとり出して、九平次のそばにいる町の衆に示

した。

徳兵衛 お町の衆ならば、さだめて印判にお見知りがいましよう。こりや、九平次、これでもあらうか。

と、つめよれば、九平次は、その証文を手にとって、つくづくと見た。

九平次 なるほど、判は、おれが判。これ、徳兵衛、土に食いつき死ぬるとても、こんなことはせぬものじゃ。この九平次、あとの月の二十五日、鼻紙袋を落して、印判を失うた。方々に張紙してたずぬれども知れぬゆえ、この月から、これ、このお町の衆へもおどけして、印判を変えたわやい。二十五日に落した判を、八日に捺さりようか。さては、そちが拾うて、証文書いて判をすえ、おれをねだって銀取ろうとは、謀判よりも大罪人、こんなことをしようよりも、盗みをせい徳兵衛、ええ、首を切らせる奴なれど、日ごろのよしみに、許しておく。とれるものなら、とってみよう。

そう言つて、証文をまるめ、徳兵衛の顔に打ちつけた。

徳兵衛は、かっとせき上げ、しどろもどろにどなった。

徳兵衛 たくんだな。いっばいくうたか、無念やな……。

あの銀、のめのめと、ただおのれに取らりようか。こ
う巧んだことなれば、訴え出ても、おれが負け、いっ
そ腕ずくで、とつてみせる。こりや、平野屋の徳兵衛
じゃ。男じゃぞ、おのれがように、友達を騙って倒す
男じゃない。さあ、こいつ！

と、胸ぐらをとれば、九平次も負けてはいなかった。

お初は、はだしで飛んで下り、

「あれ、皆さま、頼みます。駕籠の衆は、いやらぬか
……」

と、身をもがいて叫ぶばかり、どうするすべもなかつ
た。

ちやうどそこへ、客がもどってきた。

怪我があつてはたいへんと、客は、むりやり、泣きわ
めくお初を、駕籠に押し入れた。

「待って……待って……」と、お初。

「急げ、急げ……」と、客は駕籠をいそがせて、いずく
ともなく去ってしまった。

徳兵衛はただ一人、九平次は五人づれ——彼らは、あ
たりの茶屋から棒切れを持ち出してきた。そして、徳兵
衛を蓮池まで追い出して、打ったり蹴ったり、さんざん
のめにあわせた。

徳兵衛の髪は、さんばら、帯も解けた。

彼は、半狂乱で、あなたこなたへよろめきながら、叫

んだ。

「九平次め……畜生め……おのれ、生けておこうか……」
しかし九平次の姿は、もうそこには、見られなかつ
た。そのかわり、遠巻きにして、高見の見物をする町の
人々の目があった。

徳兵衛 いずれもさまの手前も、はずかしい。まったく、

この徳兵衛が、言いかけたのではござりませぬ。日
ごろ兄弟同様につきあう奴から、一生恩にきると頼ま
れて、明日七日、この銀がなければ、わたしも死なね
ばならぬ、命がわりの金なれど、互いのことと、役に
立て、証文をわたしに書かせ、印判すえ……その判
を、前かたに落したと、町内へ披露して、かえって今
のさかねだれ……口惜しゅうござる……無念でござる
……。

と、徳兵衛が叫べば、人々は、おそろしげに、あとずさ
りする。そのつめたい目を、徳兵衛は、見た。

徳兵衛 こう言うても無益のこと、この徳兵衛が正直の
心の底の涼しさは、三日を過ぎず、大阪じゅうへ申し
わけはしてみせます……。

そして、踏み破られた編笠をひろって、かぶった。

徳兵衛 いずれもさま、御苦労かけました、ご免あれ
……。

傾く日かげの中を、徳兵衛は、すごすごと帰って行っ

た。

二

恋風の身にしみわたる蜩川、曾根崎新地の灯をしたつて、恋の闇路に迷う客は、旅の田舎者、土地の馴染、粋もあり不粋もある。夜ごと夜ごとに、それらの人の通う、賑やかな新色里——そこにぎわいをよそにして、満屋の初は、内へ帰っても、今日のことばかり気にかかり、酒ものまず、気もすまず、しくしく泣いてばかりいた。

朋輩や隣の女が、時々にあずねてきて、

「徳さまは、何やらわけの悪いことがあって、たんとぶたれさんしたと聞いたが、ほんのことかいな」

「いや、わしの客の話では、踏まれて死なしたげな」
かたりをしてしばられたの、偽判してくくられたの……みんな、いやなことばかり言うのであった。

お初 ああ、もう、なんにも言うてくだんすな。聞けば聞くほど胸いたみ、わしから先に死にそうな……いっそ、死んでのけたい……。

と、初は泣くばかりであった。

と、涙にかすむ目で、ふと表を見る。かどの柳のかけに、ちらと小がくれたのは、たしかに、編笠に顔をかくした徳兵衛である。

初は、飛び立つ思いだったが、広間には亭主夫婦、上がり口には料理人、庭には下女……走り出ることもできなかった。

お初 ああ、いこう気がつきた。門見てこう……。

さりげなくそう言つて、表へ出る。そして、柳のかけの徳兵衛に、ひたとより添った。

お初 のう、これはどうぞいの。こなさまの評判いろいろ聞いたゆえ、その氣づかいさ、氣づかいさ。氣ちがいのようになつていたわいの。

初は笠のうちに顔をさし入れ、声をしのばせて泣いた。

徳兵衛も泣いた。

徳兵衛 聞きやる通りのたくみなれば、言いわけするほど、非に落ちる。そのうち四方八方の首尾はがらりと違うてくる。どうで今宵は過ごされぬこの命……覚悟はきめた。

と、ささやけば、うちから朋輩たちが、

「世間に悪い噂がある。初さま、早う内にはいらんせ」と、口々に言う。

「おお、あれじゃ、何も話されぬ。わしがするようにならんせ……」

初は、男を襦袢の裾にかくし入れ、這うようにして、中戸の沓脱からしのばせた。

徳兵衛は、縁の下にそつとはいはる。お初は、上がり口に腰をかけ、煙草を引きよせ吸いつけて、さりげない顔をしていた。

そこへ、九平次は、仲間二三人に、たいこもちの座頭をつれてくりこんできた。

「やあ、妓さまたち、さびしそうにござる。なんと、客になってやろうかい。なんと亭主、久しいの」

そんなことを言つて、九平次は、のさばり上がる。

店の者たちは、そういつても客のこと、「それ、煙草盆、それ、お杯……」と、もてなすのであった。

九平次 いやいや、酒は置きや、飲んできた。さて、話すことがある。この初の客、平野屋の徳兵衛め、わしが落した印判ひろい、二貫目の贋証文で騙ろうとしたれども、理屈につまつてあげくには、死ぬか生きるかの目に会つた。彼奴の一分は、すたつたわい。徳兵衛め、もはや世間へ顔出しはならぬ。この後ここへ来たとても、けつして油断するでないぞ。みなにこうして打ち明けるのも、徳兵衛めがきて、うらはらなことを言いふらしようも知れぬと思うたからじゃが、かならず、まことにしやるなや。寄せることも無用にしや。どうで野依か飛田で、お仕置になる奴じゃ。

九平次は、まことしやかに言いちらすのであった。

縁の下では徳兵衛が、齒をくいしばり、身をふるかし

て口惜しがる。初は、これをさとられまいと、足のさきで、じつと押ししずめる。長年ひいきにされた徳兵衛のこと、亭主もさすがに合樋もうちかねて、

「それでは、なんぞ、お吸物でも……」と、まぎらかして座を立った。

初は、涙にくれた。涙の中で、

「九平次さん……」と、言った。

お初 さのみ利根に言わぬものじゃ。わしや、徳さまとは、いく年なじみ、心根をあかしあかせし仲、それはそれはいとしいお人、露ほどわるいわけではなし、たのもしだが、仇となつて、だれさんに……。

と、きつと九平次をにらんで、

お初 だれさんやらに、瞞されさんしたもののなれども、証拠なければ、理も立たず……このうえは、徳さまも、死なねばならぬ身の上じゃが、死ぬる覚悟がききたい……。

ひとり言にかこつけて、初は男に合図をする。

徳兵衛はうなずいて、その足首とつて咽喉ぶえなで、自害するところを知らせるのであった。

お初 おお、そのはず、そのはず……いつまで生きても、おなじこと。死んで、恥をすすがずには……。

九平次は、ぎょつとして、

九平次 お初は、何を言わるるぞ。なんの徳兵衛が死ぬ

るものぞ。もしまた死んだら、そのあとは、おれがねんごろしてやろう。そなたもおれに、惚れてじゃげな。

その憎さげな顔へ、初は、ふっと煙草の輪をふいた。そして、瘡高い声で、笑った。

お初　こりや、かたじけなからうわいの。したが……わしとねんごろさあんすと、こなたも殺すが、合点か。徳さまにはなれて、片時も生きていようか。どうで徳さま死ぬる覚悟……わしもいっしょに死ぬるわいの……。

と、足でつく。その足を、徳兵衛は、しっかたととって押した。膝に抱きついて、泣いた。

九平次は、なんとなく薄気味わるくなってきた。

九平次　こりや、相場がわるいな。ここの妓衆は、変わり者で、おれらがように、金つかう大尽は、きらいそうな。さあ、あさ屋へ行つて、一杯して、がらがら金をまきちらし、そして帰ったら、さぞぐつすりと寝られるであらう。ああ、ふところが重とうて、歩きにくいわい。

九平次は、そんなことを言いちらして、仲間、たいこをつれて帰って行った。

そのあとで、亭主夫婦が、一間から出てきた。

「今宵は、灯もしまえ。泊まりの衆は、寝ませい。初

も二階へ上がつて寝や。早う寝や……」

その亭主の顔も、内儀の顔も、今宵が見納めかと思うと、初は、涙をかくすことができなかった。

旦那さま、内儀さま、もうお目にかかりますまい、さらばでござんす……心の中で、初はいとまごいを告げた。そして、二階へあがつて行った。

下女が店を片づける。

男の、門をしめる音。

それがしずまると、すぐに、高い軒がきこえてくる。

八つ（午前二時）になつてゐた。

——初は、そつと障子をあけた。白無垢の上に黒小袖をうちかけ、さし足して、二階の口から、さしのぞく。

徳兵衛は、縁の下から顔を出して、招きうなずき、指

さして、合図をする。

梯子の下には、下女が寝ている。その上に、あかあかと釣行燈がともっている。

初は、棕櫚箒に扇をゆわいつけた。そして箱梯子の二つ目から、あおいで消そうとした。

扇は、そこまではとどかなかった。

のび上がって、手をのばして、はたとあおいだ。と、その拍子に、梯子段をふみはずして、ころげ落ちた。行燈は消えた。まっくらやみの中で、下女の、うんとばかり寝返りする声がきこえる。

三

二人は、ふるえながら、手さぐりでたずねまわる。
目をさました亭主が、出てきた。

「今のは、なんじゃ。これ、女ども、有明の灯が消えた。起きて、とぼせ……」

下女は、起こされて、目をすりすり、まるはだかで起き出した。

「火打ち箱……火打ち箱……」

と、ひとり言を言いながら、あちこちと探り歩く。

さわられてはならぬと、ここかしこ這いながら逃げまわって、やっと二人手を取りあい、門口までそっと出た。

かきがねは、はずしたが、車戸のきしる音に、あけかねていると、下女が、火打ちをカチカチと打つ。

カチと打てば、そつとあける。

カチカチ打てば、そろそろあける。

そのたびごとに、二人は身をちぢめた。手に手をとって、やつとの思いで、外に出て、ほっとして顔見合わせ、

「おお、うれし……」

と、初も、徳兵衛も、死に行く身を、よろこぶのであった。

徳兵衛
おはつ 道行

この世も名残り、夜も名残り——死に行く身は、何に例えよう。あだしが原の道の霜、一足ずつに消えて行く、夢の夢、はかない夢ともいえようか。

鐘が鳴る。

七つ（午前四時）の鐘。

あれが六つ鳴れば、残る一つが今生の、鐘のひびきのききおさめともなる。

鐘ばかりか、草も木も空も、今宵が名残り——と、見

上げれば、雲も水も、無心に流れる。

蜷川のおもてには、北斗七星が影を投げ、牽牛と織女のあいだを流れる天の川も映っている。

二人の渡る梅田橋——それを、かささぎの橋になぞらえて、女夫星の長いちぎりにあやかろう。

向こうの二階は、何屋であろう。灯影の窓に、客と遊女が、より添って話の最中——おそらく今年の心中の噂でもしているのであろう。明日はわれらがその噂の数に入り、世にうたわれることであらう。ままよ、うたわばうたえ……。

と、どこからともなく唄がきこえてくる。